

## 祝125周年 京都大学とジョージ・セル

吉田英生 (S53/1978卒)

### 1. 同時期からはじまる2冊の本より

クラシック音楽CDの業界でよく繰り返されるのが、名演奏家の生誕あるいは没後なん年といったファンの心をくすぐる企画です。それで今年6月、米国クリーヴランド管弦楽団の名指揮者ジョージ・セル(George Szell)の生誕(1897年6月7日)125年という特集広告を見て、京都大学創立の同年同月18日に先行することたった11日!と気付いたのです<sup>1</sup>。さらに、やはり生誕125年を意識してのことでしょう、セルの副指揮者を務めたマイケル・チャーリーの『ジョージ・セル——音楽の生涯』(6月23日発行、鳥影社、599頁)も続きました(原著は2011年発行)。

一方、京大125周年記念基金への筆者からの心ばかりの協力に対し、大学からは『京都大学百二十五年史 通史編』(6月18日発行、484頁)が送られてきました。

そこで、同時期からはじまるこれら2冊の本に基づいて、セルがハンガリーのブダペストに生まれクリーヴランドで生涯を終えるまでの73年間について、京大との時代対応も多少は意識しながら追ってみようという無謀(単なる両者のファンとしての自己満足?)なことを考えました。その結果が次ページに示す年表1に集約されています。左側には百二十五年史から目次の章と節だけを抜き出しました。一方、右側にはセルの生涯から重要事項を抜粋しました(赤字は特に重要部分)。

○京都帝国大学の模索期と、セルが10歳半でピアニスト兼作曲家として楽団デビューし、将来は作曲家かピアニストか指揮者かを模索する時期が重なります。

○セルの音楽人生の半ばで最大の転機となったのは疑いなくクリーヴランド管弦楽団の音楽監督に就任したときですが、それはまさに京都帝国大学が新制京都大学として生まれ変わったタイミングと一致します。

○1970年、日本の高度成長の象徴である大阪万博の期間中(学内では「大学紛争」はとりあえず収束したものの、1960年6月23日に発効した日米安保条約10年目で自動更新期間に入ったことでストや封鎖が続いていました)、フェスティバルホールに世界の名門オーケストラが数多く来日。セルとクリーヴランド管弦楽団も5月に初来日し、20日には京都会館でもベートーヴェン交響曲第3番ほかを演奏しました。セルは、その後ソウルとアンカレッジでのコンサートを最後に、帰国後の6月10日に大学病院に入院(来日直前の4月下旬に末期癌であることを告知されていました)、6月18日に心臓発作を起こし7月30日になくなりました。

<sup>1</sup> 余談ながら、京都大学にも留学したドナルド・キーンさんは1922年6月18日生まれで生誕100年!

## 年表1 京都大学とセルの対比（73年間）

(セルの年表は前掲書を参考にして加筆しました。なお、人名・楽団名・学校名は原語で記載しました。)

京都大学		George Szell		
	1897.6.18	1897.6.7	ブダペストに生まれる。(父はハンガリー人、母はスロバキア人)	
第一編 京都帝国大学	第一章 創立期 1897-1909 第一節 創立経緯 第二節 創立 第三節 各種制度設計	1899 1903-4	2歳で、ハンガリー語、ドイツ語、フランス語、チェコ語で民謡を歌う。また、母のピアノの間違いを指摘。 ウィーンで音楽の勉強を始める。Eusebius Mandyczewskiの下で作曲と理論、Richard Robertの下でピアノを学ぶ。	
	第二章 模索期 1908-1918 第一節 沢柳事件前後 第二節 制度・組織改変などの動き 第三節 学生生活	1908 1909-10 1912 1914 1914.7.28 1915-17 1917-18	10歳半で、Vienna Tonkünstler Orchestraでピアニスト兼作曲家としてデビュー。The New Mozartと呼ばれる。 ヨーロッパツアー。Max Regerの下で学ぶ。 Universal Edition 社と十年間の作曲の契約。 17歳で、Blüthner Orchestra, Berlin で指揮者デビュー。 第一次世界大戦始まる(戦争末期1918年にチェコスロバキア建国)。 Berlin Royal Operaの副指揮者。Richard Straussとの親交始まる。 Strasbourg Operaで、Hans Pfitznerの下で第一指揮者。	
	第三章 整備期 1919-1932 第一節 制度改革 第二節 学部・附置研究所などの設置・整備 第三節 学生生活と思想問題	1919-20 1920 1924-29 1927-29 1929-37	German Opera House, Pragueの副指揮者。 Olga Bandと結婚。(1926年ごろ離婚) Berlin State Operaで、Erich Kleiberの下で第一指揮者。 Hochschule für Musik, Berlinの教授。 32歳で、German Opera House, Pragueの首席指揮者。ヨーロッパ、ソ連、イギリス、セントルイスで客演指揮者。	
	第四章 戦時期 1933-1945 第一節 滝川事件 第二節 戦時体制下の諸動向(一) 第三節 戦時体制下の諸動向(二) 第四節 敗戦前後	1933 1936 1937-39  1938 1938-39 1939.9  1939 1941-42 1942-46  1944.11 1945.12-1946.1	Residence Orchestra, The Hagueデビュー。 Royal Concertgebouw Orchestra, Amsterdamデビュー。 Scottish Orchestra, Glasgow、Residence Orchestra, The Hagueの指揮者。 グラスゴーでHelene Schultz Teltschと結婚。 複数のAustralian Broadcasting Corporation Orchestraと契約。 1日にドイツとスロバキアがポーランドへ侵攻。3日にイギリス・フランスがドイツに宣戦布告。17日にソ連もポーランドへ侵攻。1941年には日米も参戦し、第二次世界大戦となる。 New Yorkで、New School for Social ResearchとMannes School of Musicで作曲と最新の理論を教える。 Detroit Symphony、NBC Symphony、Los Angeles Philharmonic、Ravinia Festivalの客演指揮者。 45歳で、Metropolitan Operaの首席指揮者。Philadelphia Orchestra、Chicago Symphony、Boston Symphony、New York Philharmonicの客演指揮者。 Cleveland Orchestraの客演指揮者(第1回)。 Cleveland Orchestraの客演指揮者(第2回)。	
	第二編 京都大学	第一章 新制発足期 1946-1955 第一節 戦後高等教育改革 第二節 新制京都大学発足 第三節 各種体制整備 第四節 学生生活	1946.1.24 1946.10.17  1946.10.18 1949-69	49歳で、Cleveland Orchestraの正指揮者、音楽監督。 音楽監督として初コンサート：ウェーバー「オベロン序曲」、ドビュッシー「牧神の午後への前奏曲」、シュトラウス「ドン・ファン」、ベートーヴェン交響曲第3番「英雄」。 アメリカ市民となる。 オランダ、ザルツブルク、チューリヒの各音楽祭。
		第二章 拡大期 1956-1969 第一節 高度経済成長下の拡大 第二節 学生生活 第三節 大学紛争	1957 1957-60 1958-61 1965 1967  1969	Cleveland Orchestraの初ヨーロッパツアー。 ウィーン国立歌劇場。スカラ座のコンサート。 Royal Concertgebouw Orchestraの共同指揮者。 Cleveland Orchestraのソ連・ヨーロッパツアー。 Cleveland Orchestraの音楽祭ツアー —— ザルツブルク、エジンバラ、ルツェルン。 New York Philharmonicの音楽顧問兼上級客演指揮者。
		第三章 再編期 1970-1990 1970.3.16 湯川秀樹先生(京大創立10年後の1907生まれ)が退官講義 「大学紛争」とはとりあえず収束したもの、1960.6.23に発効した日米安保条約の当初10年の固定期間が満了し単年毎の自動更新期間に入った(1970.6.23)ことで、一部学生によるストライキや封鎖といった激しい運動が続いていた。	1970.4 5.13  5.15、16 5.20 6.10 6.18 7.30	末期癌であることを告知される。 Cleveland Orchestraのポートランド・シアトル・日本・韓国・アラスカツアーで来日。セルの万に備え、ピエール・ブーレーズも分担指揮者として同行。(なお、13日はPan Amのチャーター機が遅延し、伊丹空港夜間閉鎖のため小牧空港から名神高速道路で大阪に移動) フェスティバルホールで公演。 休日に京都では平等院を観光。 京都公会館で公演：ベルリオーズ 序曲「ローマの謝肉祭」、ラベル「タフニスとクロエ第2組曲」、ベートーヴェン交響曲第3番「英雄」。 Case Western Reserve University 病院に入院。 心臓発作を起こす。 没。

## 2. 小さな国ながら天才を数多く輩出するハンガリー

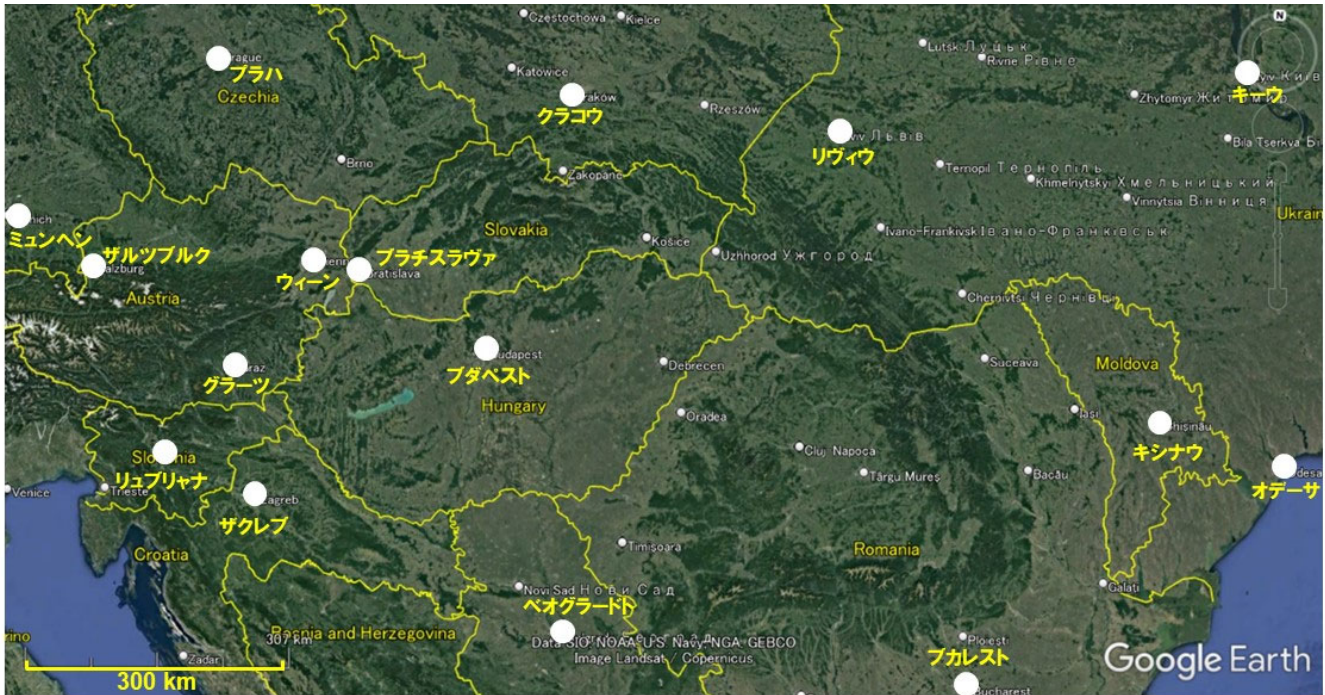


図1 ハンガリーと周辺諸国

年表1だけで終わりますと、単なる一ファンのメモ程度の意味しかありませんので、この機会に周辺の話——まず、セルの母国で日常的に話題になることの少ないハンガリーについて少し振り返ってみたいと思います。図1に示すように、ハンガリーは中欧には分類されますが、東欧に分類されて戦乱の続くウクライナを含め7つの国と接しています。ハンガリーの面積は日本の約1/4で、首都ブダペストから音楽の都ウィーンには北西に300キロもありませんので、ハンガリー周辺は小さい国がひしめきあっている感じです。現在の人口は1000万人弱で、アジア系のマジャル人を中心とするハンガリーでは、名前も姓・名の順に記載します。

ハンガリーで特筆すべきは、ジョルジュ・マルクスの『異星人伝説—20世紀を創ったハンガリー人』（日本評論社、2001）<sup>2</sup>にもあるように、抜きんでた人材（ほとんどがユダヤ系）を多数輩出していることでしょう。流体物理学者のテオドル・フォン・カルマン（1881–1963）、数学者のジョン・フォン・ノイマン（1903–1957）、投資家のジョージ・ソロス（1930–）など天才中の天才揃いです。

指揮者に限っても生誕順に、アルトゥール・ニキシュ（1855–1922）、フリッツ・ライナー（1888–1963）、ジョージ・セル（1897–1970）、ハンス・スワロフスキ

<sup>2</sup> 本書冒頭部分の原文が <https://mek.oszk.hu/03200/03286/html/tudos1/martians.html> に抜粋掲載されています。



ー (1899–1975)、ユージン・オーマンディ (1899–1985)、ヤーノシュ・フェレンチク (1907–1984)、ゲオルク・ショルティ (1912–1997)、フェレンツ・フリツチャイ (1914–1963)、イシュトヴァン・ケルテス (1929–1973) など枚挙にいとまがありません。その中でも、セルは“The New Mozart”と呼ばれたことでも示されるように真の天才というべきでしょう。

セルの詳細については <http://georgeszell.com/> や [https://en.wikipedia.org/wiki/George\\_Szell](https://en.wikipedia.org/wiki/George_Szell) などでもよく分かりますので省略させていただきますが、前掲のマイケル・チャーリーの本から、原文で以下の3つだけ引用します。

○Szell was born in Budapest of Jewish parents. His family converted from Judaism and moved to Vienna when he was three, and there he was raised a Catholic. Throughout his life Szell felt ambivalent about his Hungarian origin, claiming Czech ancestry through his mother’s side. He became a citizen of the newly formed Czechoslovakia in 1919 and of the United States in 1946, the year he became musical director in Cleveland. (Introduction)

○Szell’s most significant life accomplishment was as musical director of the Cleveland Orchestra. He raised it from the ranks of respected second-tier ensembles to the highest level of world class. The Szell/Cleveland Orchestra combination is legendary. (Introduction)

○“My aim in developing the Cleveland Orchestra has been to combine the finest virtues of the great European orchestras of pre–World War II times with the most distinguished qualities of our leading American orchestras.” (In Szell’s Words)

### 3. 京都でのセル



京都に到着し、ホテルでピエール・ブーレーズらと語り合うジョージ・セル(1970年5月20日)

セルは1970年5月13日にPan Amのチャーター機で伊丹空港から入国予定でしたが、遅延で夜間制限のため小牧空港に変更し、名神高速道路で大阪に移動しました。フェスティバルホールでの初日公演は5月15日でしたが、前日はカラヤンとベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の公演という何とも贅沢な日々で、会場の

図2 「ライヴ・イン・東京1970」SICC-40041のライナーノートより。写真協力：ソニー・ミュージックレーベルズ

下見に訪れたセルは、リハーサル中のカラヤンと再会しました<sup>3</sup>。フェスティバルホールでは15・16日の2回（ピエール・ブーレーズが17・18日）指揮した後、セルは京都に移動して平等院を観光したのち、20日はいよいよ京都会館での公演！そのときの演奏会評が京都新聞に掲載されていたので紹介します。

京都新聞1970年5月23日（夕刊）

クリーブランド交響楽団京都公演を聞いて

浄守志郎

五月二〇日夜、ジョージ・セル率いるクリーブランド管弦楽団の演奏を聞く。セルとクリーブランドのレパートリーは広いが、なんといっても本命は、ハイドン、モーツァルト、ベートーベンからドイツロマン派にある。当夜のプログラムはベルリオーズとラベルの小品二曲とベートーベン交響曲第三番の組み合わせ。セルのきわめてきびしい完璧主義はオーケストラに対してさ細な欠点をも許さず、音楽の三要素、リズム、メロディー、ハーモニー、の構成の美しさを徹底して追求して行く態度は聞きしにまさるが、決して小細工はしない。そうかといって細かいデテールまでおろそかにはせず、率直で余計な表情などはつけない。音色は清潔で透明、アンサンブルは比類なく精緻（せいち）。ともかくセルは自己の感情を押えて客観的な構築の美しさを企図しているのだが、作品の本質、いかにすれば作曲名が音によって表現しようとしたなにもものは実に巧みにとらえているのである。

冒頭のベルリオーズの序曲「ローマの謝肉祭」ですでにこのオーケストラのなみなみならぬ卓越した個性は明示された。弾力的な主題で始まるこの曲を密度の高いパートのバランスで息づかせ、直截（ちよくさい）でありながらよくクリーンカットされた音色は、正確きわまるリズムやフレージングにうらづけられて厳正で寸分のすきもない。

ラベルの「タフニスとクロエ第二組曲」でもこの姿勢はくずれることなく物語ふうの曲を、端的に言えば純粋な音たち（無機的といえるほどの）の展開によって進行させて行く。これはわれわれ日本人が怠っているフランス感覚とは異質と思われるが、そのような郷愁を一しゅうして人間的な感情を別の世界の美学によって誇示するかのようだ。

ベートーベンの第三番は当夜の聞きどころ。セルとオケの「勘」が一体となり、計算されつくした指揮のままに実によく動き、すきのない生気にあふれた演奏であった。第二楽章のカンタービレは比類のない美しさで迫り、トリオの少し前からの高揚などは壮麗をきわめ、たたき込んでくるリズムは悲愴（そう）美を見事に昇華させる。アツェレランドとリタルダンド、クレシェンドとディミニユエンドが自然に取り扱われてすばらしい効果をあげていたことや、コーダの煙のごとく消えさる芸の細かさは印象的であった。総じてどの部分をとっても整然として、さながら大弦楽四重奏から発する音のようで、ぜい肉を取り去って凝縮した演奏はユニークというほかはない。

聞き終わって私はかつて一時代を風びしたトスカニーニとNBC管弦楽団との近似性を想起せずにはいられなかった。原作に忠実でありながらあくまでもセルの個性を出し切った演奏は、単なるザハリヒ（即曲的）なもの及ばない境地であった。どちらもヨーロッパで出来なかったことをやりとげたということに深い感慨をもった。（音楽評論家）

余談ながら、当時、筆者はクラシック音楽とは無縁の関西の中学3年生でしたが、もう2～3年早く生まれていたら、万博には行かなくてもフェスティバルホールか京都会館には駆けつけていたのと思います。その点は残念ですが、セルが亡くなる約2ヶ月前に京都を訪れて素晴らしい演奏をした——きっと京機会会員の中にも聴かれた方がいらっしゃると思い、京大・京都への思いと重ねて125周年記念の拙稿とした次第です。創立と生誕をむりやり結びつけた駄文をお許しください。

<sup>3</sup> 東条碩夫「マエストロたちのあの日、あの時」 完璧さの具現、巨匠ジョージ・セル  
<https://mainichi.jp/articles/20220714/org/00m/200/001000d>